

3. 定点把握対象感染症患者報告状況（週報）

（１）過去５年間の報告状況

疾患名	2016 年 (平成 28 年)	2017 年 (平成 29 年)	2018 年 (平成 30 年)	2019 年 (令和元年)	2020 年 (令和 2 年)
インフルエンザ	9,808	10,178	12,318	10,024	3,095
RS ウイルス感染症	1,976	2,044	1,684	1,862	140
咽頭結膜熱	448	718	466	563	222
A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,347	2,229	1,729	772	475
感染性胃腸炎	9,708	6,737	6,511	6,192	3,365
水痘	300	352	259	262	192
手足口病	332	2,041	1,212	2,086	71
伝染性紅斑	343	92	200	666	115
突発性発しん	798	858	848	470	514
ヘルパンギーナ	876	687	817	486	170
流行性耳下腺炎	1,399	817	110	56	50
急性出血性結膜炎	1	1	—	3	—
流行性角結膜炎	30	43	58	117	29
細菌性髄膜炎	2	—	4	3	3
無菌性髄膜炎	3	2	3	7	4
マイコプラズマ肺炎	57	13	26	131	43
クラミジア肺炎	1	—	1	1	—
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	58	12	2	8	1

(2) 各疾病の報告状況

① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

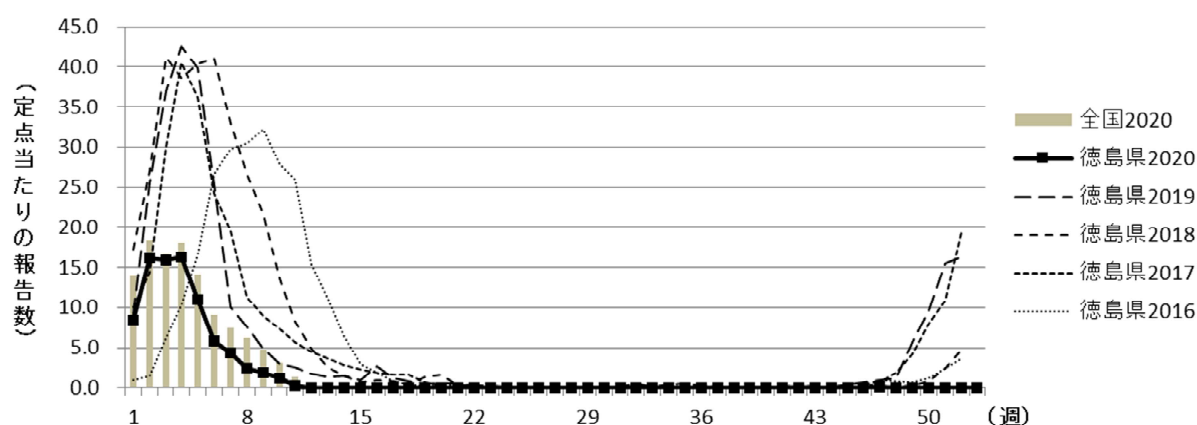
2020年の年間報告数は3,095件であり、前年（10,024件）より大幅に減少した。

本年の前期流行は、例年より遅く第2週に流行期入りした後、第4週で報告数のピーク（16.35件／定点）を迎えた。ピークの高さは前年（42.57件／定点）より大幅に低く、報告数が注意報レベル（10件／定点）を超えた期間（第2～5週）は、前年（第2～7週）と比べほぼ変わらなかった。

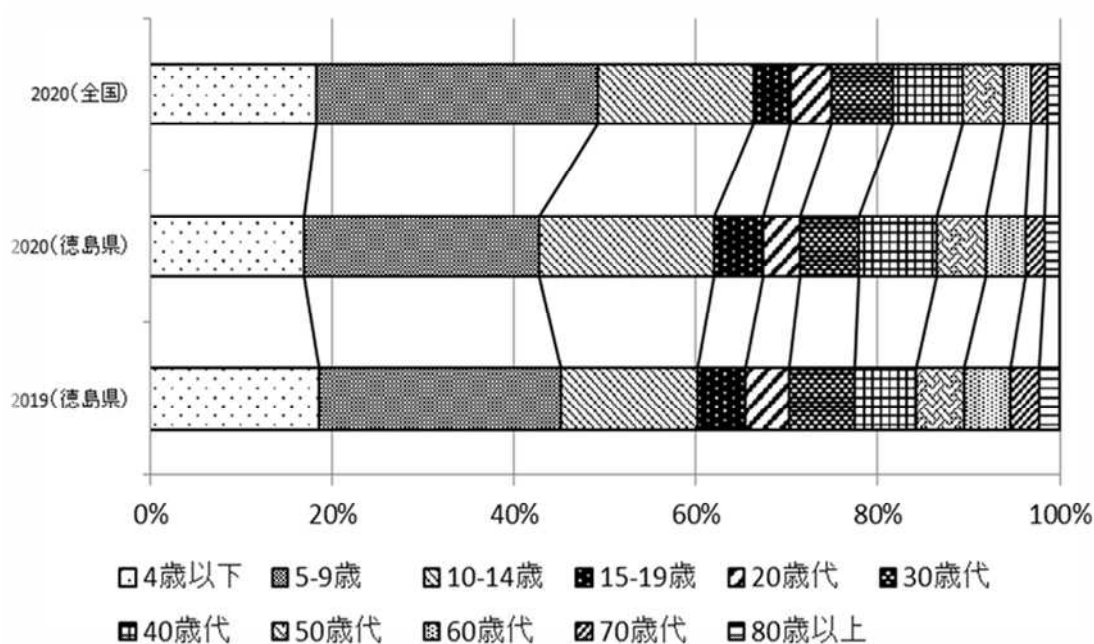
後期流行については、流行開始の目安とされる1.0件／定点を超えることなく、低水準（0.00～0.05件／定点）のまま越年した。

年齢層別報告数では、4歳以下16.83%、5～9歳25.85%、10～14歳19.29%、15～19歳5.46%、20歳以上32.57%であり、前年と同様20歳以上の割合が高かった。

インフルエンザの週別患者報告状況



インフルエンザの年齢層別報告数



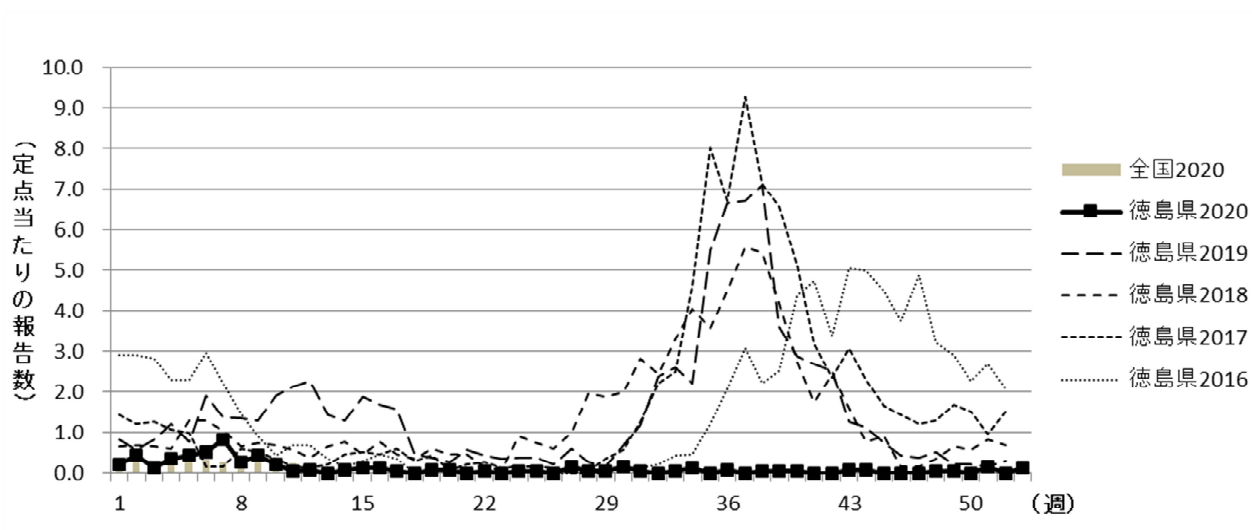
② RS ウイルス感染症

2020 年の年間報告数は 140 件であり、前年（1,862 件）より大幅に減少した。

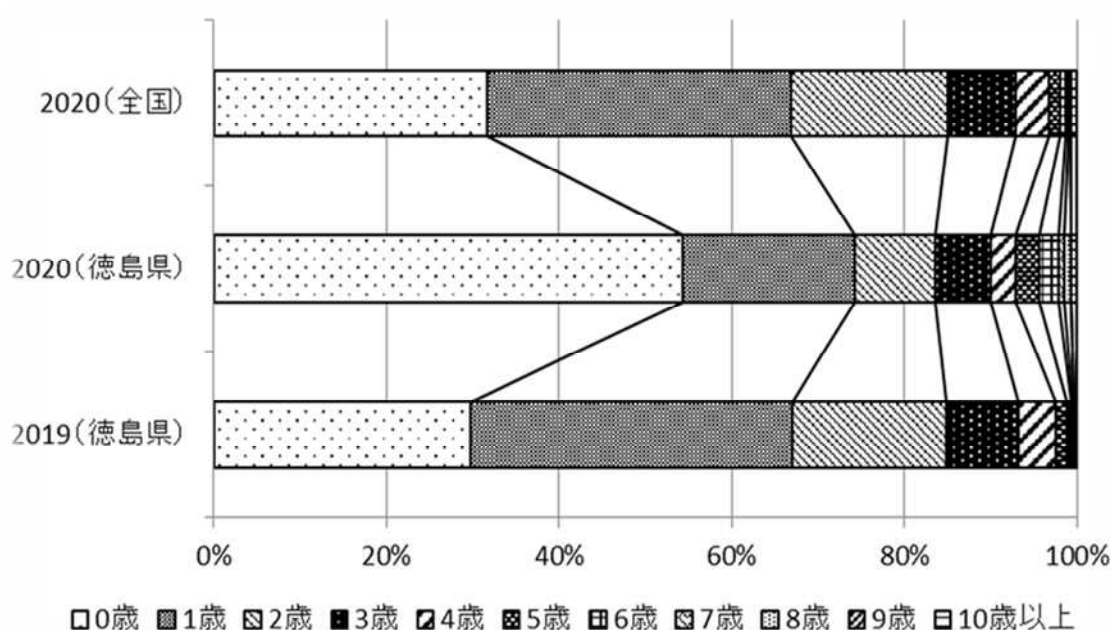
本疾患は、2016 年以前は主に秋から冬にかけて流行していたが、2017 年以降は 7 月頃から報告数が増加し、9 月初旬にピークを迎え、夏から秋にかけて流行している。しかし本年は季節的な変化はなく年間を通して目立ったピークもないまま低水準（0.00～0.83 件／定点）で推移した。

本疾患は 2 歳までの乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数でも、0 歳 54.29%、1 歳 20.00%、2 歳 9.29%、3 歳 6.43%、4 歳以上 9.99%であり、前年と同様に 2 歳以下の乳幼児の割合が大半（約 84 %）を占めた。

RS ウイルス感染症の週別患者報告状況



RS ウイルス感染症の年齢層別報告数



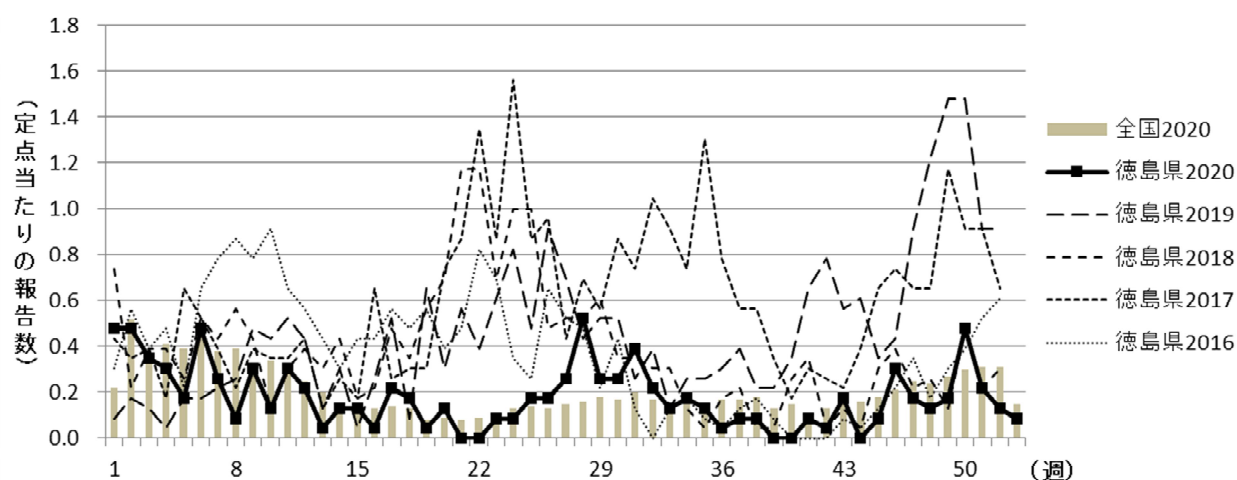
③ 咽頭結膜熱

2020年の年間報告数は222件であり、前年（563件）より大幅に減少した。

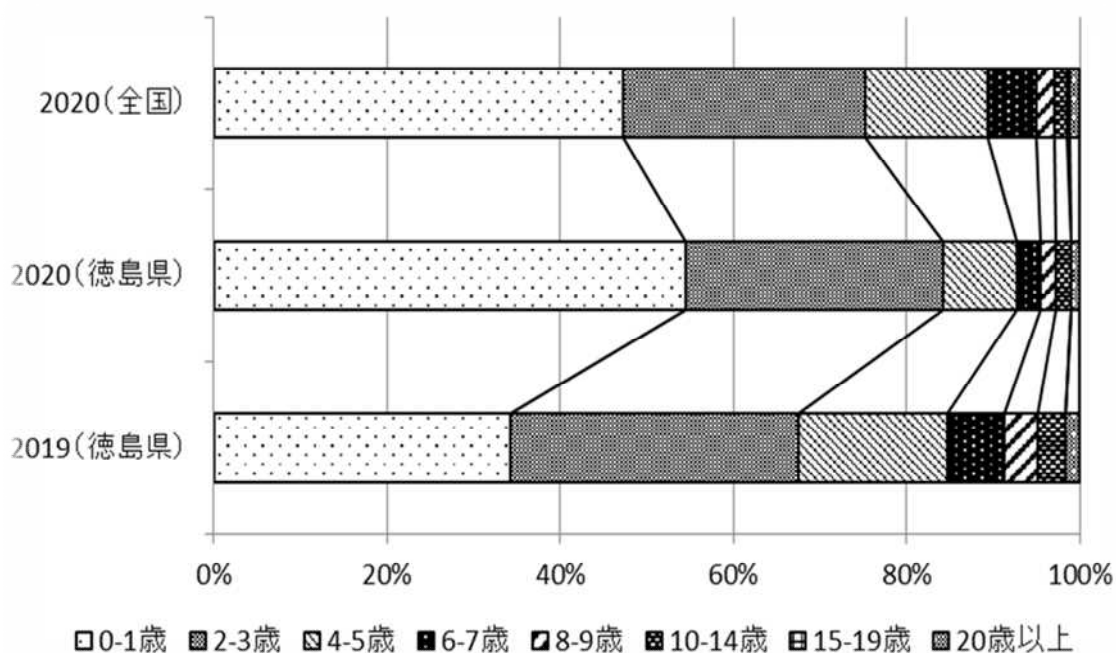
本疾患の流行パターンは、4月ごろから報告数が増加し始め、7～8月にピークを示した後、冬季にも流行のピークが見られる。本年は6月上旬頃より報告数が増加しはじめ、第28週に小さなピーク（0.52件／定点）を示した。7月は全国平均を上回ったが、年間を通しての報告数は低水準で推移した。

本疾患は一般的に4歳以下の乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数も、0～1歳 54.50%、2～3歳 29.73%、4～5歳 8.56%、6～7歳 2.70%、8歳以上 4.51%であり、5歳以下が約93%を占めた。

咽頭結膜熱の週別患者報告状況



咽頭結膜熱の年齢層別報告数



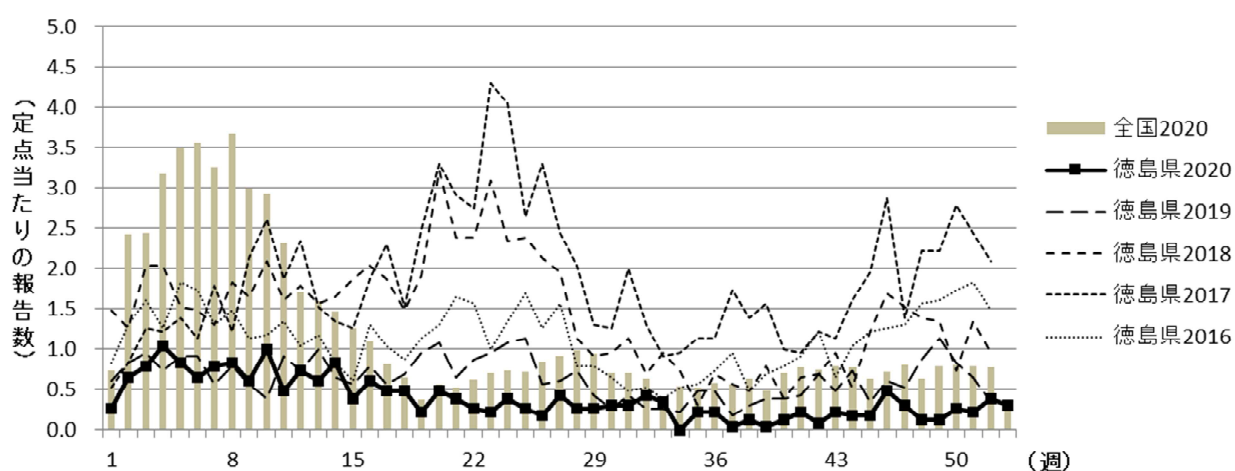
④ A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

2020年の年間報告数は475件であり、前年（772件）から大幅に減少した。

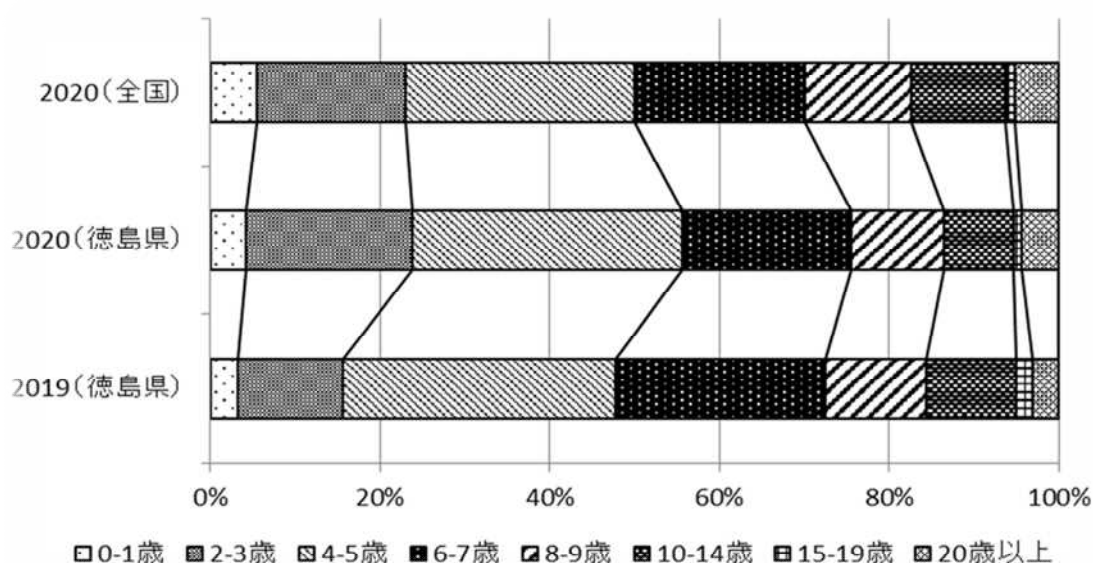
本疾患は、冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年は、年当初から報告数が少なく、年間を通して目立ったピークも無く報告数の低い状態が続いた。

本疾患は幅広い年齢層から報告されるが、学童期小児からの報告が多いとされる。本年の年齢層別の報告数も、0～1歳 4.21%、2～3歳 19.58%、4～5歳 31.79%、6～7歳 20.00%、8～9歳 10.95%、10～14歳 8.21%、15歳以上 5.26%と、学童期小児の割合が高かった。

A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別患者報告状況



A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢層別報告数



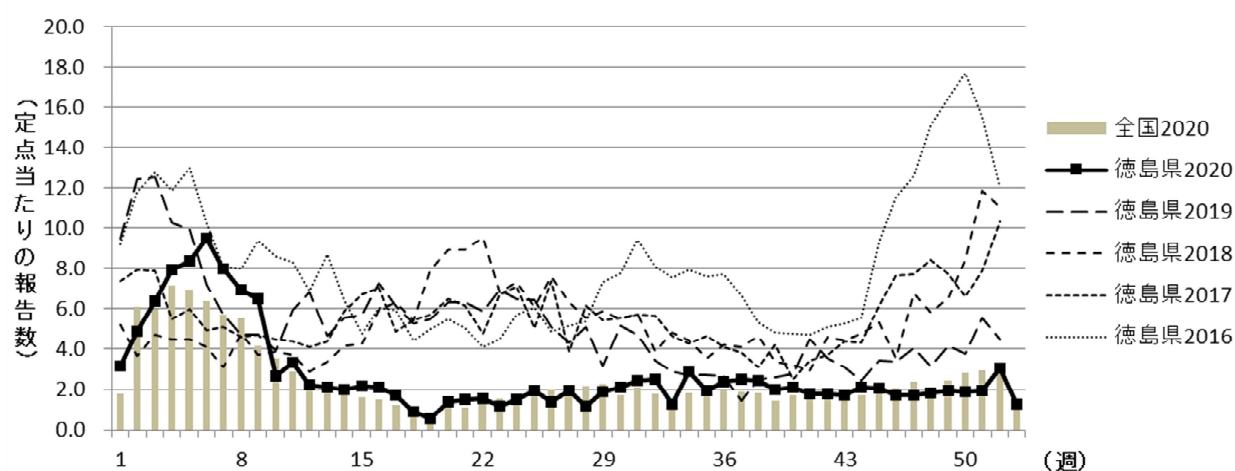
⑤ 感染性胃腸炎

2020年の年間報告数は3,365件であり、前年（6,192件）から大幅に減少した。

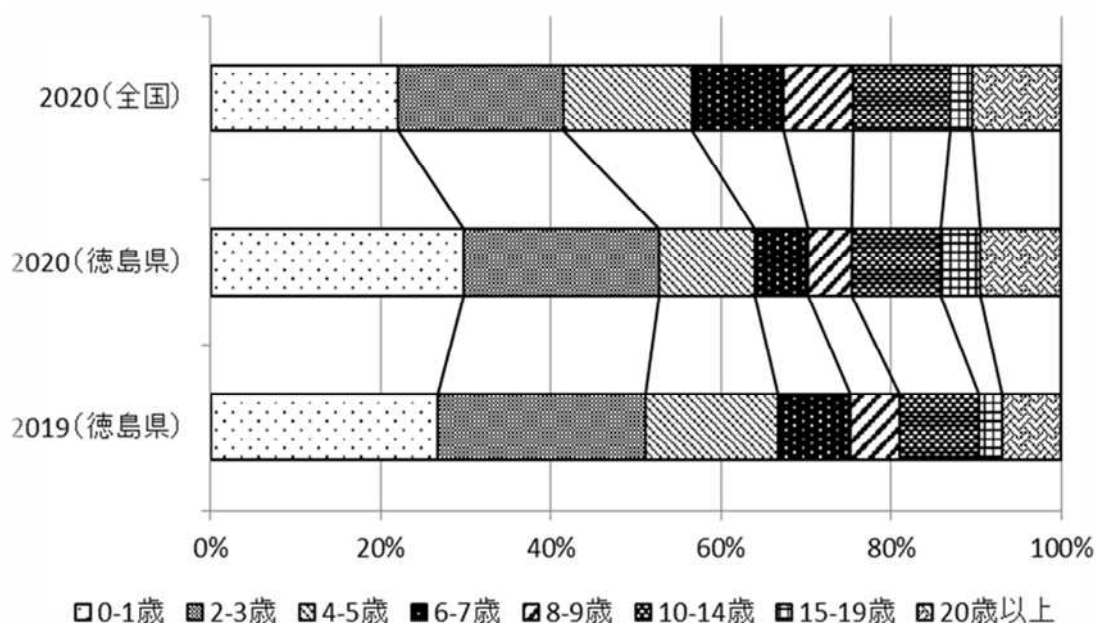
本疾患の流行パターンは、初冬から増加し始め、12～1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一つ緩やかなピークを示すことが多い。本年の前期流行は、前年の後期流行に続き第6週頃までは報告数が多かったものの、以降は減少した。本年は目立った後期流行はなかった。

年齢層別報告数は、0～1歳 29.69%、2～3歳 23.00%、4～5歳 11.26%、6～7歳 6.33%、8～9歳 5.05%、10～14歳 10.52%、15歳以上 14.15%と5歳以下の乳幼児が全体の約64%を占めた。

感染性胃腸炎の週別患者報告状況



感染性胃腸炎の年齢層別報告数



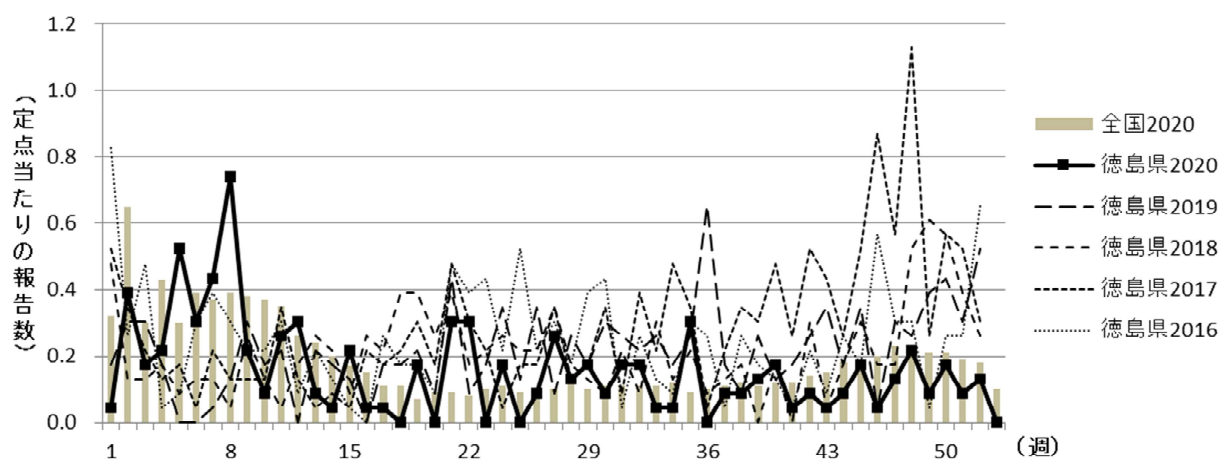
⑥ 水痘

2020年の年間報告数は192件と前年（262件）より減少した。

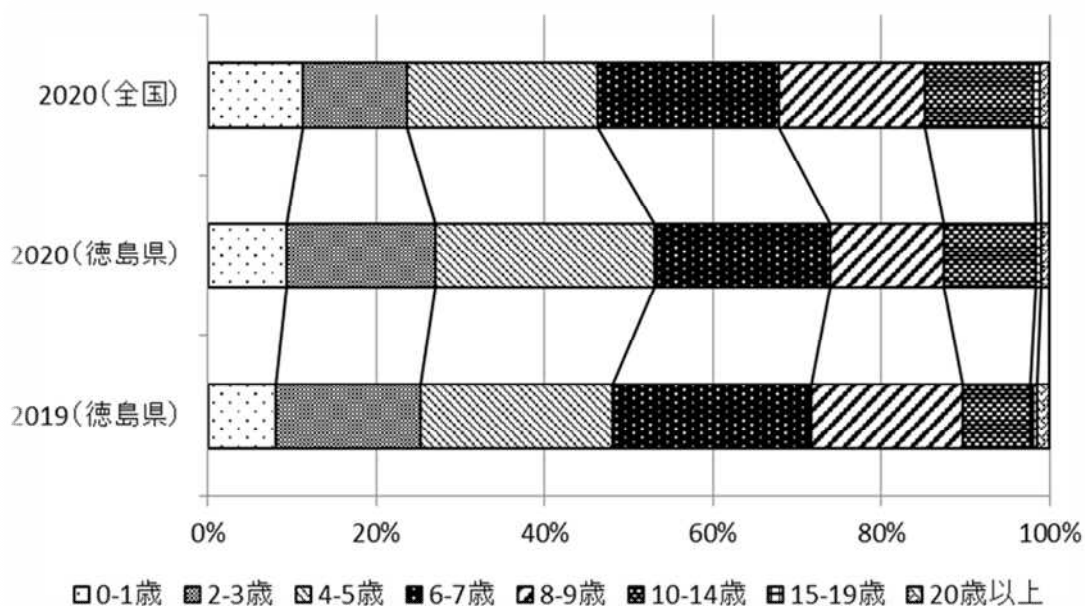
本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされる。本年も年間を通して報告され、2月中旬に県内の一部地域において地域流行などみられたものの、大きなピークは見られず、年間を通じて低い報告数（0.8件／定点未満）のまま推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳 9.38%、2～3歳 17.71%、4～5歳 26.04%、6～7歳 20.83%、8～9歳 13.54%、10歳以上 12.50%と10歳未満の報告が全体の約88%を占めた。

水痘の週別患者報告状況



水痘の年齢層別報告数



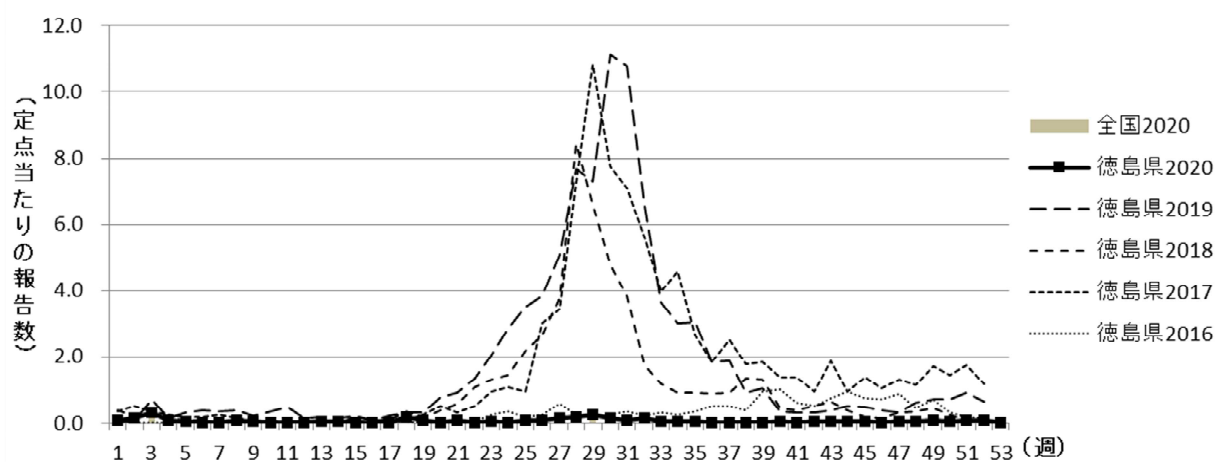
⑦ 手足口病

2020年の年間報告数は71件であり、前年（2,086件）より大幅に減少した。

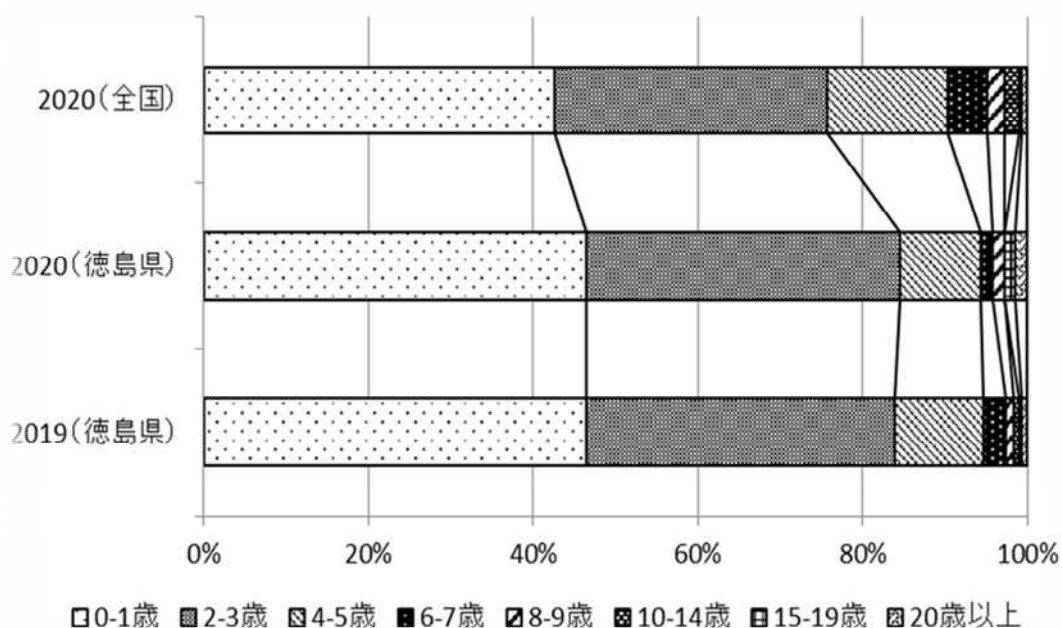
本疾患は1年おきに流行を繰り返している。また本疾患は夏に流行する代表的な感染症であり、例年7～8月にピークを迎えるが、本年は年間を通して目立ったピークはなく、年間を通じて低い報告数（1.0件／定点未満）のまま推移した。

年齢層別報告数において、例年、5歳以下の乳幼児からの報告が9割を占めており、本年も、0～1歳46.48%、2～3歳38.03%、4～5歳9.86%、6～7歳1.41%、8歳以上4.22%であり、5歳以下からの報告が全体の約94%を占めた。

手足口病の週別患者報告状況



手足口病の年齢層別報告数



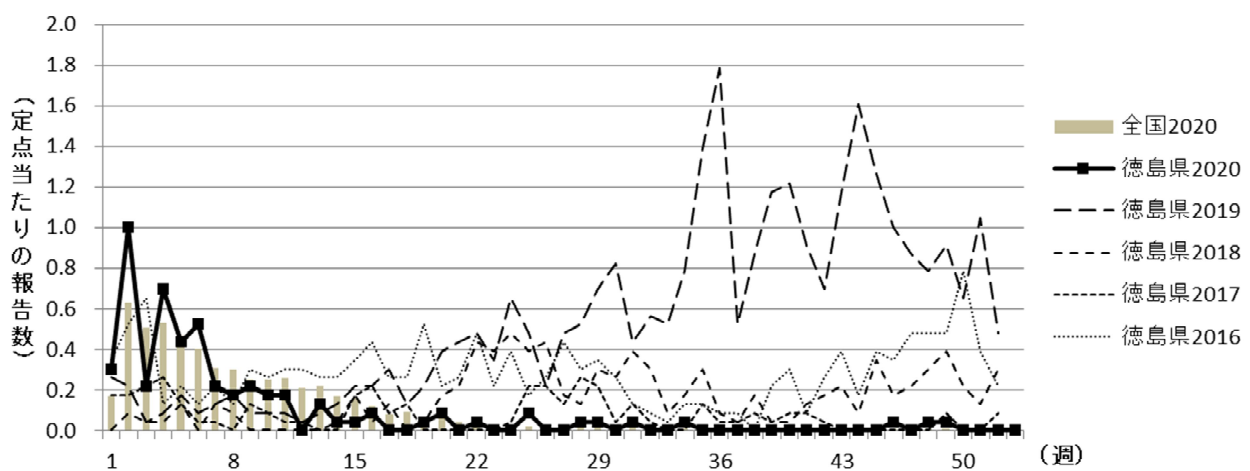
⑧ 伝染性紅斑

2020年の年間報告数は115件と、前年（666件）から大幅に減少した。

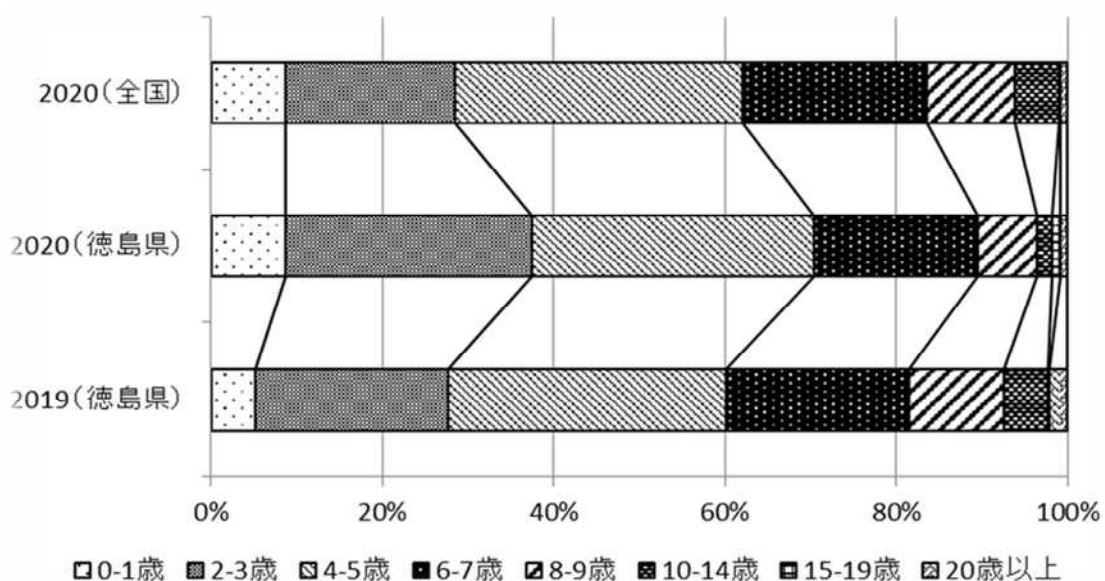
本疾患は、年始頃より7月上旬にかけて増加するが、流行の小さい年は季節性が見られないことが多い。本年は第2週で報告数が増加し、ピーク（1.00件／定点）を示し、その後増減を繰り返しながら第6週までは全国平均を上回る週も見られたが、その後は減少し低水準で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳8.70%、2～3歳28.70%、4～5歳33.04%、6～7歳19.13%、8～9歳6.96%、10歳以上3.47%と、2～7歳の報告が全体の約81%を占めた。

伝染性紅斑の週別患者報告状況



伝染性紅斑の年齢層別報告数



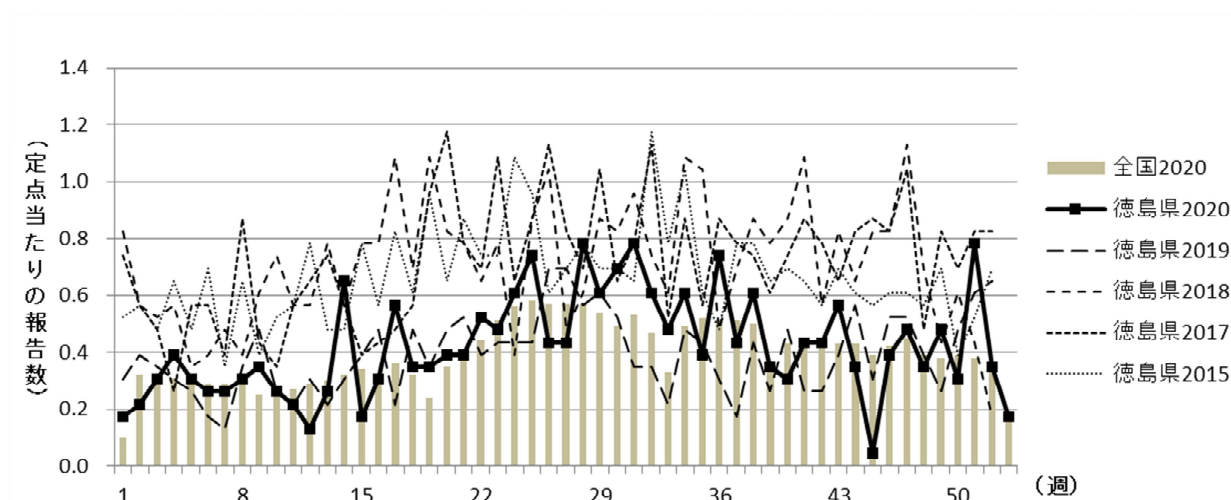
⑨ 突発性発しん

2020年の年間報告数は514件であり、前年（470件）から増加した。

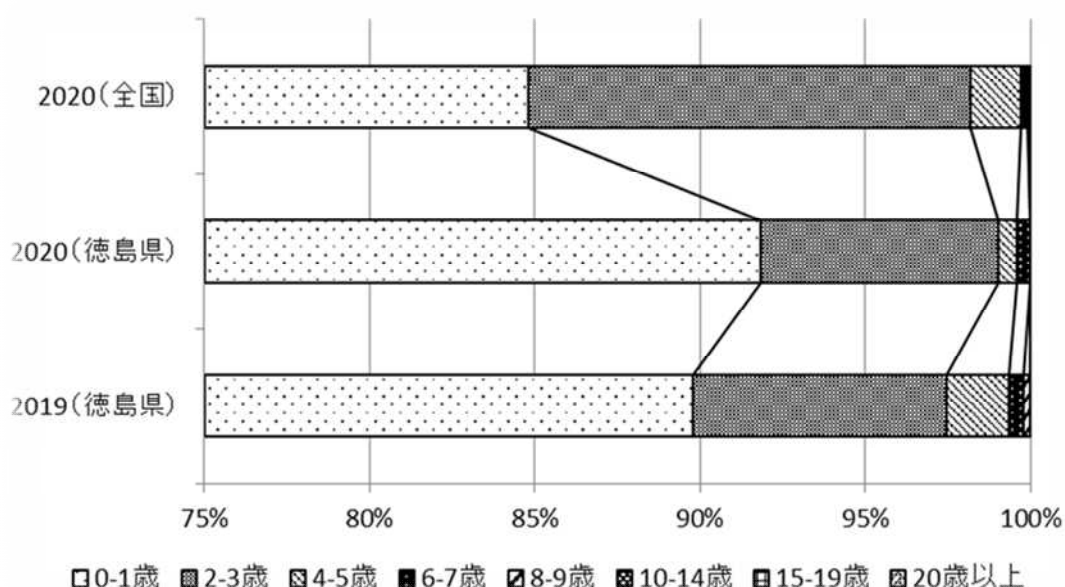
本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内で推移するとされる。本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内（0.04～0.78件／定点）で推移した。

年齢層別報告数では6カ月～1歳代の小児に好発し、ほとんどの子どもが3歳までに感染するといわれている。本年も0～1歳91.83%、2～3歳7.20%、4～5歳0.58%、6歳以上0.39%と、1歳以下が最も多く報告され、3歳以下で大半の約99%を占めた。

突発性発しんの週別患者報告状況



突発性発しんの年齢層別報告数



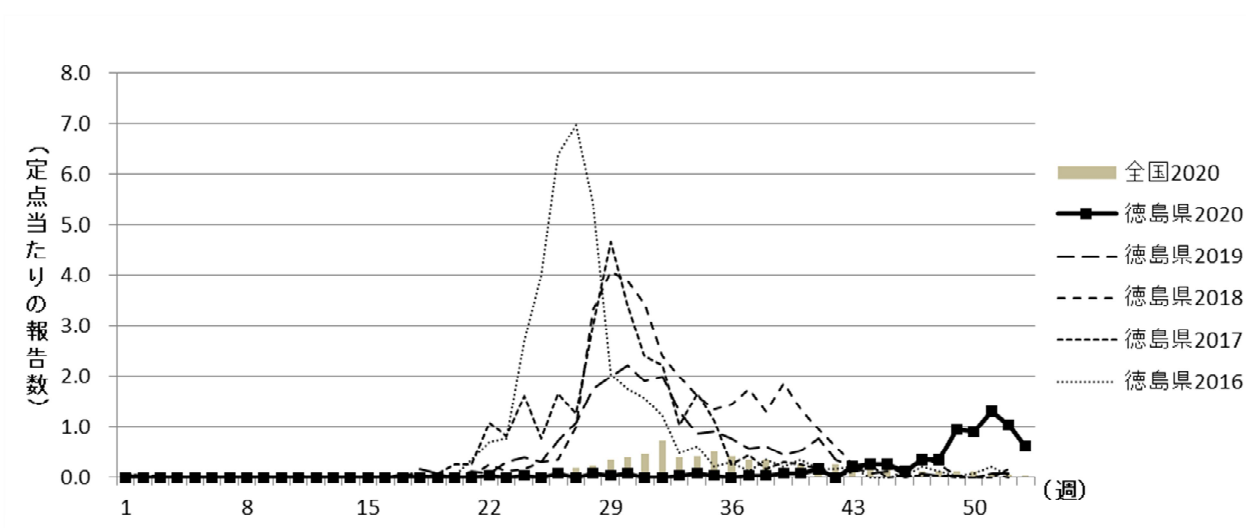
⑩ ヘルパンギーナ

2020年の年間報告数は170件と、前年(486件)から大きく減少した。過去の報告数の推移でも、486～876件と、流行の大きかった年と小さかった年では約2倍の差が見られる。

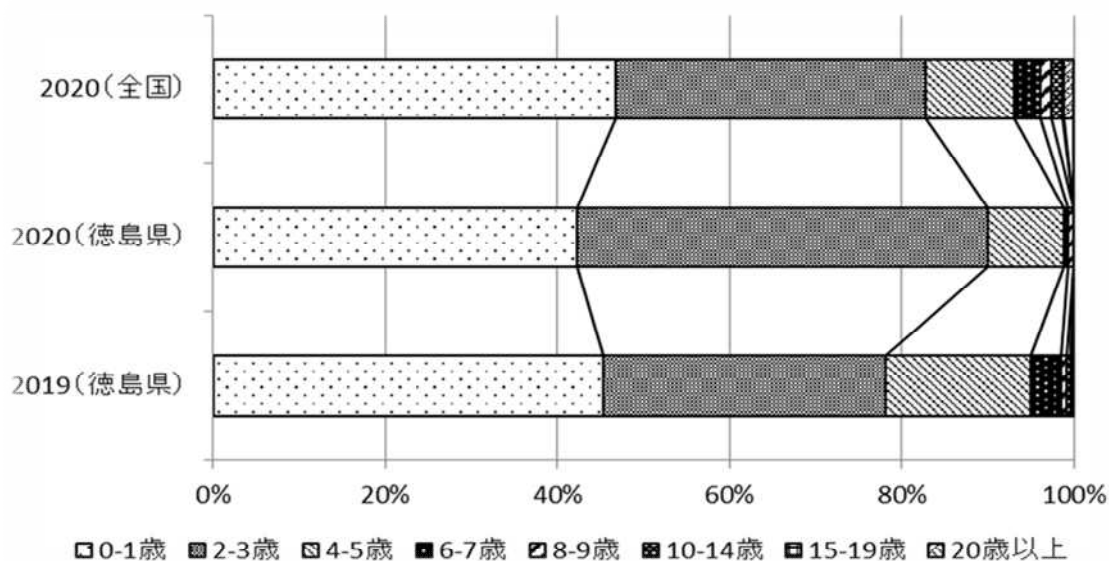
本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は目立った流行はなく報告数は低値(0～0.35件/定点)で推移していたが、第49週頃より報告数が増加しはじめ第51週にピーク(1.30件/定点)を示した。

年齢層別報告数では、5歳以下が大半を占め、1歳代が最も多いといわれている。本年も、0～1歳42.35%、2～3歳47.65%、4～5歳8.82%、6～7歳0.59%、8歳以上0.59%であり、5歳以下の乳幼児が約99%を占めた。

ヘルパンギーナの週別患者報告状況



ヘルパンギーナの年齢層別報告数



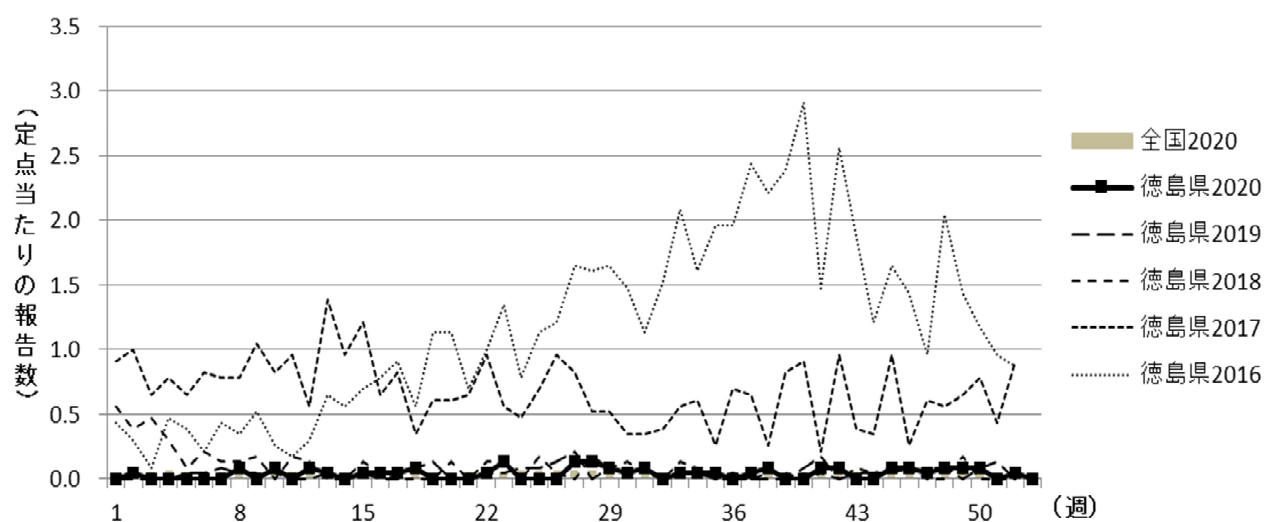
⑪ 流行性耳下腺炎

2020年の年間報告数は50件と、前年（56件）からやや減少した。過去10年間では2010～2011年、2016～2017年と、数年おきに大きな流行が見られている。

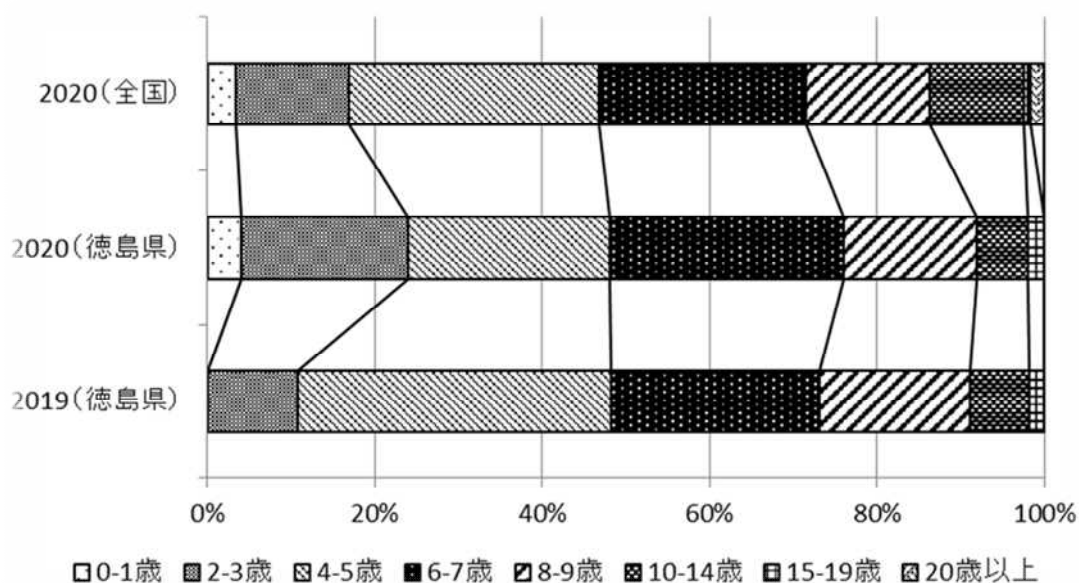
本疾患は年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて報告数が増加するとされる。また、3～4年ごとの周期で流行を繰り返すが、本年は流行が見られず年間を通して低値で推移した。

年齢層別報告数では、0歳から4歳まで年齢を重ねるとともに増加し、5歳以降は年齢とともに減少するとされている。本年も、0～1歳4.00%、2～3歳20.00%、4～5歳24.00%、6～7歳28.00%、8～9歳16.00%、10歳以上8.00%であり、2～7歳の幼児からの報告数が72%を占めた。

流行性耳下腺炎の週別患者報告状況



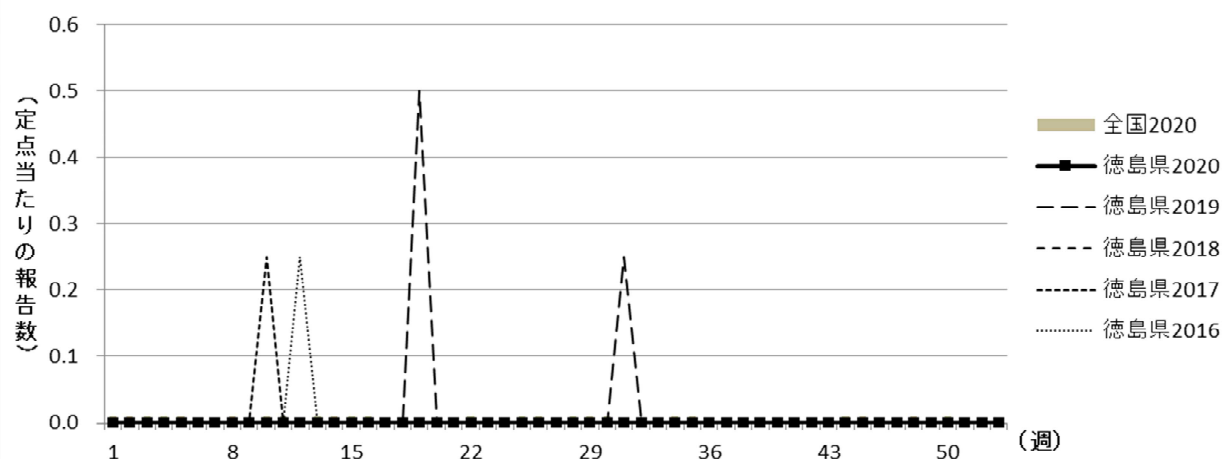
流行性耳下腺炎の年齢層別報告数



⑫ 急性出血性結膜炎

2020年の年間報告数は0件と、前年（3件）から減少した。本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いまま微増微減を繰り返すとされる。過去5年間でも毎年0～3件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

急性出血性結膜炎の週別患者報告状況

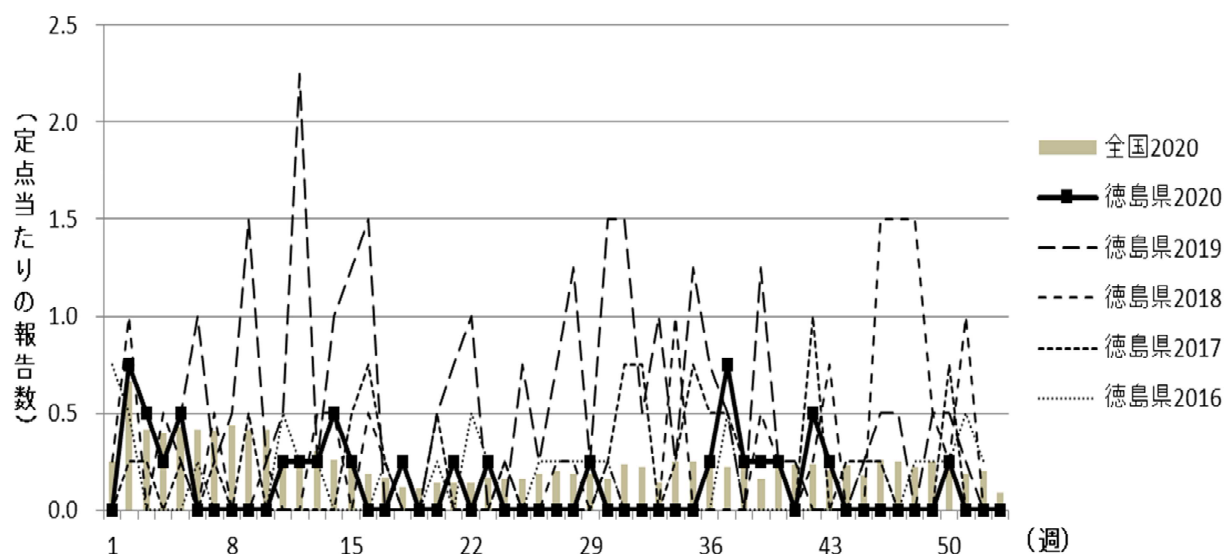


⑬ 流行性角結膜炎

2020年の年間報告数は29件と前年（117件）から減少した。過去5年間の報告数は年々増加傾向であったが本年は大幅に減少した。

年齢層別報告数では、10歳未満 3.44%、10歳代 10.35%、20歳代 20.69%、30歳代 41.38%、40歳代 17.24%、50歳代 6.90%と幅広い年齢層から報告された。

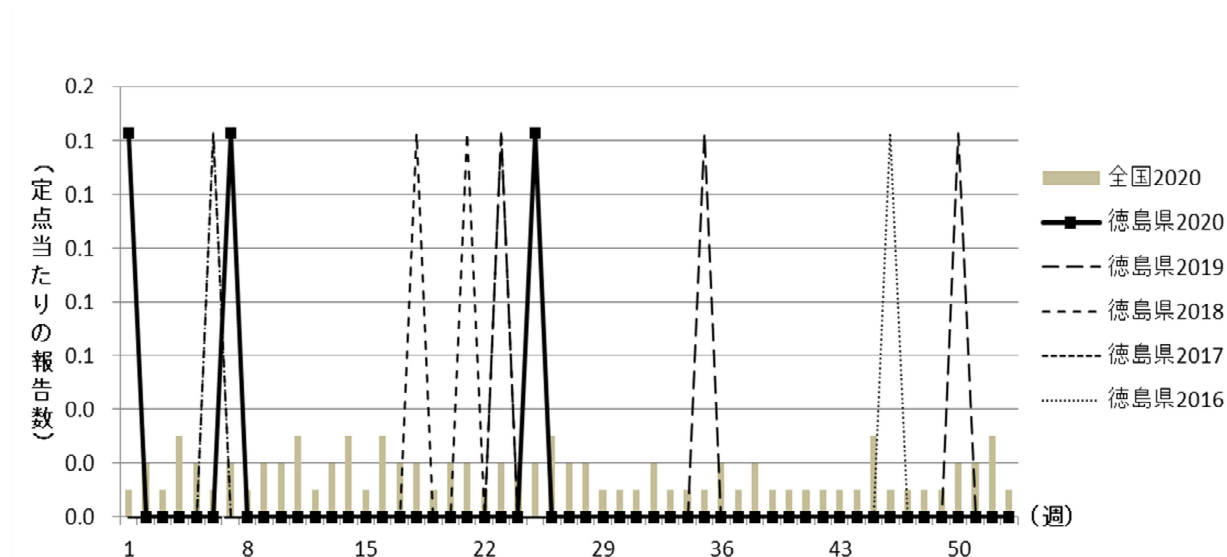
流行性角結膜炎の週別患者報告状況



⑭ 細菌性髄膜炎（髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く）

2020年の年間報告数は3件（0～70歳代）と、前年（3件）と横ばいであった。過去5年間では、毎年0～4件で推移している。

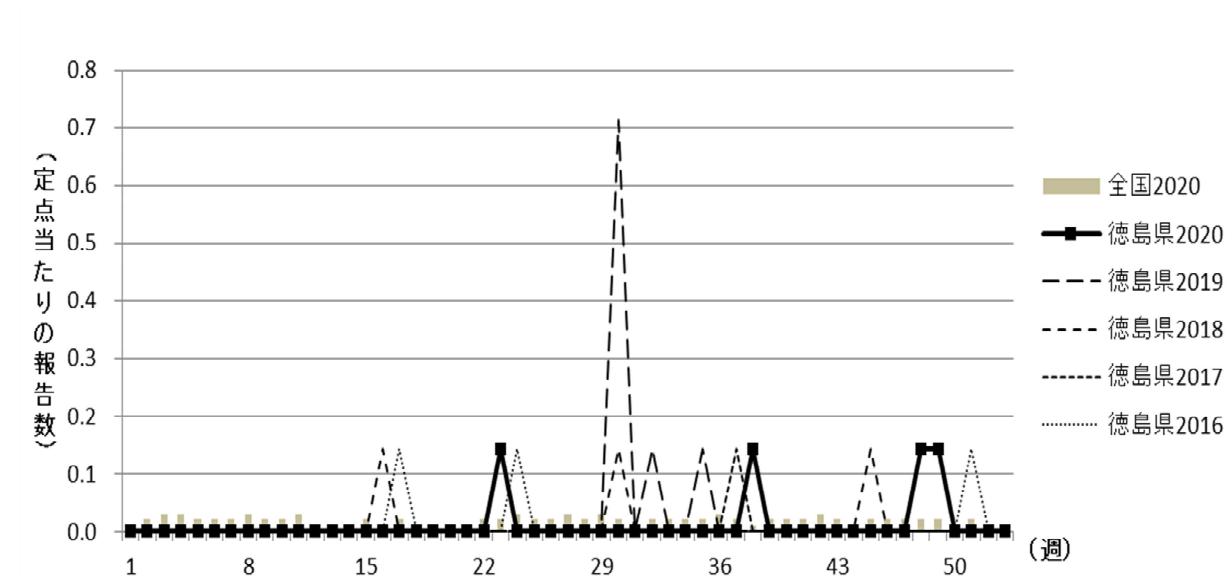
細菌性髄膜炎の週別患者報告状況



⑮ 無菌性髄膜炎

2020年の年間報告数は4件（10歳～80歳代）と、前年（7件）から減少した。過去5年間では毎年2～7件で推移している。

無菌性髄膜炎の週別患者報告状況



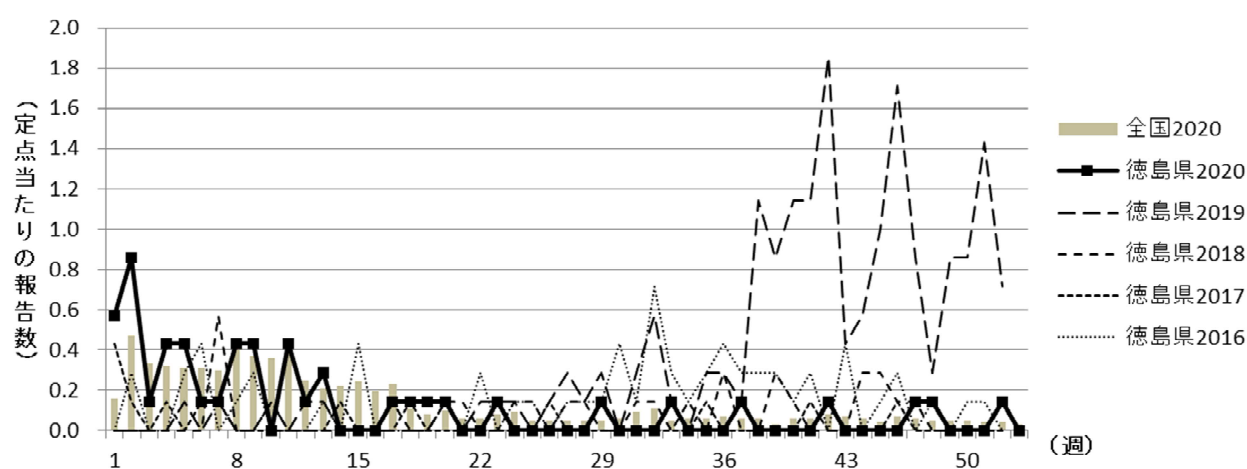
⑩ マイコプラズマ肺炎

2020年の年間報告数は43件と、前年（131件）から大幅に減少した。過去5年間では毎年13～131件で推移している。

本疾患は年間を通して発生するが、秋から冬にかけてやや多くなるとされる。本年の流行は、前年の後期流行に続き第2週までは全国平均を上回り報告数が多かったものの、その後は多少の増減を繰り返しながら減少し、第14週以降は低値（0～0.14件／定点）で推移した。

年齢層別報告数では、幼児から成人まで報告されるが、学童期、青年期に多いとされる。5歳未満18.60%、5～9歳39.53%、10歳代23.26%、20歳代以上18.61%と幅広い年齢層から報告された。学童期を含む10歳未満からの報告数（約58%）が他の年齢層に比べ多かった。

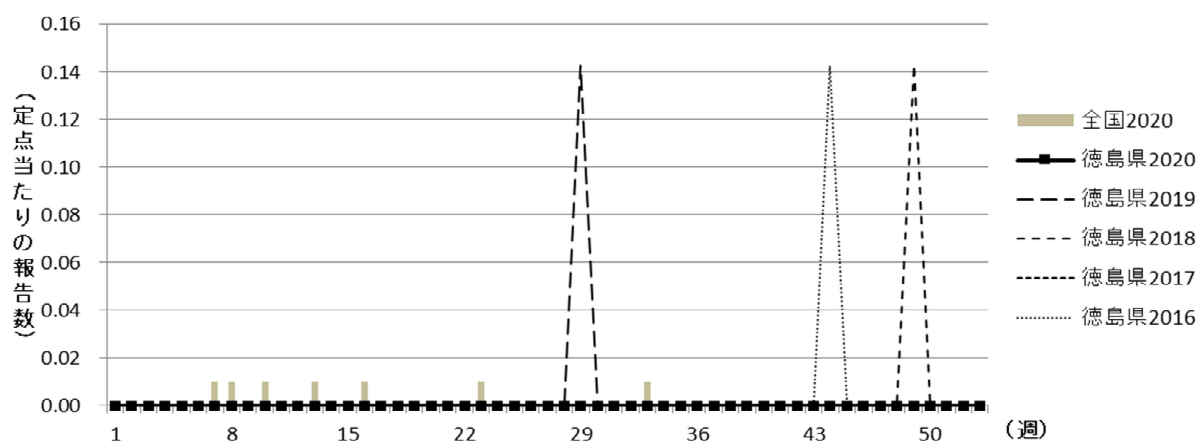
マイコプラズマ肺炎の週別患者報告状況



⑪ クラミジア肺炎（オウム病を除く）

2020年の年間報告数は0件であった。過去5年間では、毎年0～1件で推移している。

クラミジア肺炎の週別患者報告状況



⑮ 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

2020年の年間報告数は1件（10歳未満）と、前年（8件）から減少した。過去5年間では、2016年が58件と最も多かったが以降減少傾向である。例年、年当初から春先にかけて多く報告され、夏季は減少するなど、季節的な特徴も見られたが、本年は年間を通して低値（0～0.14件／定点）で推移した。

感染性胃腸炎（ロタウイルス）の週別患者報告状況

